

この研究では、重度の障がいを持っている人や山間部に住む人、また引きこもり、不登校、高齢であるといった理由でアクアスに来館できない、または来場しづらい人たちを対象に、デジタル上での観賞や「アクアート」といったアクアスで行われるアート活動のイベントなどの取り組みによって、対象者にどのような効果を与えるのかを検証する。

10月28日、11月4日の2日間で行われたイベント、アクアート「しずかでにぎやかなうみ」では対象者がアクアスに訪れ、ペンギン館にて用意された道具や画材を使って、絵を描いたり紙粘土で立体アートをつくったりして、それぞれがアート制作活動を楽しんだ。

11月6日には、浜田養護学校にて創作ワークショップを行った。この活動では、アクアスで行ったアクアート「しずかでにぎやかなうみ」と同じ画材を浜田養護学校へ持ち込み、教室の床に長方形の長い1枚の障子紙を敷いてそこに生徒たちが自由に書き込むという形で創作活動を行った。

そして、アクアート「しずかでにぎやかなうみ」と創作ワークショップにて制作された作品は、アクアスのペンギン館1階で開催される「うみ・いろ・かたち展」で展示された。展示中には、創作活動に参加してくれた福祉施設利用者の方々の姿なども見られ、和気あいあいと作品を鑑賞したり、館内の魚たちを観賞したりしていた。

12月11日に開催されたミニアクアートでは、スマートグラスと水中ドローンを使ってデジタル上でペンギンたちを観賞できるイベントが行われた。どちらも Zoom を通して行われ、アクアスに来館した人やアクアス館内以外で Zoom に接続した人たちが自由に観賞した。

研究結果としては、このイベントを通し、アート活動を自由に楽しめたことで、参加者たちはアクアスと楽しかった思い出が結びついたと考える。実際に、「しずかでにぎやかなうみ」に参加した方々が開館日にも訪れていたことから、アクアートのイベントがアクアスに訪れるきっかけになりうると考えた。またデバイス上の観賞の効果としては、その後実際に訪れたかの確認は取ることができなかったものの、当日の参加者の様子から大いに楽しんでもらえたことがうかがえる。よって、デバイス上の観賞はアクアスに訪れるきっかけなる可能性は十分あると予想した。また、デジタル上の観賞はアクアスに来場できない人たちが楽しめる手段として有効なことが分かった。しかし、今回行ったデジタル上の観賞は、機材や飼育員さんの協力が必須のため、継続して定期的に配信するのはアクアス職員の負担を考えると、難しいと考えた。